
鏡に映るもの

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鏡に映るもの

【Nコード】
N5498G

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
中世ドイツ。森の中を旅していたハインリヒとフリッツの主従が辿り着いた森にいた貴婦人の正体とは。ドイツは森の国でこうした存在のお話多いです。

第一章

鏡に映るもの

ドイツは森の国である。そして城の国でもある。ワーグナーの音楽を聴いていてそこに森と城を思い浮かべる者もいる。そのドイツの深い森を今一人の若い騎士が従者を連れて歩いていった。

「なあフリッツ」

「何でしょうか、若旦那様」

少し年輩の従者は馬の首のすぐ横を歩いていった。そうして騎乗する自分の若き主を見上げた。主は鎖の鎧に身を包み茶色の豊かな髪と緑の澄んだ目を持っていた。引き締まり若々しい美貌の持ち主でその顔には気品もあった。貴公子と言ってもいい姿であった。

「この辺りに城はなかったか」

「この辺りにですか」

「見渡す限り森だが」

見回せば確かに木々しかない。モミの木がうつそうと繁っている。まだ夕刻だというのに暗いものがある。森はそこまで深く暗かった。

「宿はないか」

「少なくとも今見える限りでは」

「ないな」

「残念ですが」

こう主に答えるフリッツだった。

「これは」

「仕方がないな。もう少し進んでだ」

「はい」

「何もなければ適当な場所で休もう」

こう言うのだった。

「それでいいな、今日も」

「私はそれで構いませんが」

ここでフリッツは氣遣う顔で主を見上げる。そうして問うのであった。

「若旦那様はそれでは」

「私は別に構わない」

だが彼は己の従者にこう返すのだった。落ち着いた静かな声で。

「それはな」

「宜しいのですか？」

「旅とはこういうものだ」

割り切った言葉であった。

「野に休みそこで起きる。もう何日もそうしているではないか」

「ですがそれは御身体に」

「この程度で倒れるようではそもそも戦うことなぞできはしない」
今度はこう言う彼だった。

「私の名はハインリヒ」フォン」クリストハイム」

「ええ」

これが彼の名だった。ドイツでは知られた家である。代々東方の辺境伯を務めその武勇により東方の外敵を退け続けているのだ。

それは若き彼とて同じでその剣で年少の頃から戦場に立ち多くの敵を退けてきている。だからまだ若いとその歳以上の武勲を挙げているのだ。

「この程度のことは戦場ではいつものことだ」

「だから大丈夫ですか」

「そなたも知っている筈だ」

こう己の従者に返しもした。

「私にとってこの程度のことはな」

「何でもない」と

「そういうことだ。わかればだ」

「暫く進んで宿がなければ」

「適当な場所で休む。木のほとりでもな」

「そうですね。幸い木には困りませんし」

見渡す限り本当に木ばかりだ。ドイツの森は深い。そこには何もかもがいるとさえ言われてきた。何かしら不気味なものすらあった。

「適当な場所に」

「食べ物」

「はい、あります」

ハインリヒのこの質問には答えることができた。

「ここに」

そして己が背負っている袋を指し示してみせた。

「充分にありますので」

「パンだね」

「パンとあとはソーセージです」

「まだそれもあつたのか」

「ええ。三日前に市場で買ったあれば」

「そうか。そういえば随分買ったんだつたね」

「こういうことを見越して買っておきました」

主を見上げて笑つての言葉だった。

「何かあつた時につて」

「そうか。いつも済まないな」

「いいつてことですよ。あと水ですが」

「それはどうしようか」

「そうですね。一応ビールも買っておきましたし」

「それを飲もうか」

「はい、そうしましょう」

水分についての話も整った。

第二章

「疲れていますよね」

「まあそれもね」

これはハインリヒも認めるしかなかった。

「少しは」

「そうですね」

主の痩せ我慢は見なかったことにするフリッツだった。これも彼の氣遣いである。その氣遣いができるところに彼の人間性があるのだった。

「そういう時はやはりビールです」

「そういうことだね」

「ですが少ししかありませんので」

「わかってはいるさ。そこまで飲むつもりはないよ」

今度のハインリヒの返事は真剣そのものだった。

「酔い過ぎたからね。騎士としてはよくない」

「その通りです。用心がありますので」

「そういうことでね」

「休みましょう。手頃な場所で」

「そうしようか。いや」

だがここで。不意に声をあげたハインリヒだった。フリッツも彼の声を聞いて主に対して問うのであった。

「若旦那様、何が」

「いや、あそこだけね」

暗くなるうとして森の中を指差しての言葉だった。

「あそこに。湖があるぞ」

「確かに」

それは彼にも見えた。はっきりとそこにあつた。森の木と木の間に青いその湖が見えていた。その青は黒に変わろうとしていたがそ

れでもまだ残っている青は見る事ができたのだ。

「あれは。湖です」

「それだけじゃない」

ハインリヒはまた言ってきた。

「あそこに見えるのは」

「城ですね」

「古城だろうか」

不意にこう言うハインリヒだった。

「あれは」

「それはわかりません。ですが」

「うん。例えば誰もいなくても城に入ろう」

こう従者に提案するのだった。

「外にいるよりは中にいる方が安全だ」

「そのうえ突然の雨や夜露も防げます」

「その通りだ。それでは」

「盗賊の類がいた場合はどうされますか？」

「その時は決まっているさ」

答えるハインリヒの声は毅然としたものに変わった。

「その時は」

「はい」

「斬る」

一言であつた。

「それだけだよ」

「不貞の輩は許せない。そういうことですね」

「この辺りに民家はないけれど盗賊というものは人を害するもの」

「確かに」

彼はこう考えていた。実際にこの当時のドイツは治安が極めて悪く森の中に普通に盗賊がいたからこのように考えているのだ。実際に彼もこの旅において何度か盗賊達に対して剣を振るっている。実経験から来る言葉でもあつたのだ。だから強いものがあつた。

「それではその心積もりもして」

「行こう。いいね」

「はい、それでは」

馬の上とその馬の首の横から頷き合いそのうえで森に入っていく。そうして湖のほとりにあるその古城の前に来た。古城は古ぼけてはいるがそれでもまた充分な美しさと気品をたたえそこに立っていた。決して大きくはないが見栄えは立派な城であった。

「さて、中に入ろう」

「そうですね。では」

ハインリヒは馬から降りて城の門の前まで来た。大きさ的には出城と言つていいものだった。だがそれでもその外観は白くやはり立派なものだ。その前まで来ると。不意にその門の扉が開くのだった。
「むっ!？」

「開いた!？」

その黒い門が開いたのを見てハインリヒもフリッツもそれぞれの武器に手をかけた。ハインリヒは腰の剣に、フリッツは携帯している斧に。それぞれ手をかけたのである。

「何だと思うか」

「間違いないかと」

フリッツは正面に顔と身体を向け主に横目で応えながら述べた。

「やはり今回も」

「賊か」

「まず間違いありません」

こう言うのであった。

「向こうから開いたということは」

「ならば斬り伏せるのみだ」

「いつも通りですね」

「そうだ。来るなら来い」

今まさにその門から出て来ようとしているであろう相手に対して述べた。

「このハインリヒ。そう簡単にやられはせぬぞ」

その決意を剣に込め待ち構える。だがその門から出て来たのは。柄の悪い盗賊などではなかった。むしろそれと正反対の相手であった。

第三章

「むっ!？」

「貴女は」

「旅のお方ですか？」

出て来たのは白いドレスを着た妙齡の美女だった。溢れ出る様な黒髪と黒檀の目が白い肌に映えている。妖艶な感じのする女だった。

「もしや」

「は、はい」

「そうですか」

畏の可能性もある。その危惧を抱き警戒を解かないまま美女に対して応える二人であった。

「貴女は一体」

「どなたなのですか？」

「この城の主です」

美女は静かに微笑んでからこう述べるのだった。

「名はテレジアといいます」

「テレジア様ですか」

「そう。テレジア「フォン」ヒルデスハイム」

こう名乗ってきた。

「これが私の名です」

「そうですか。貴女がこの城の主で」

「フラウと御呼び下さい」

またテレジアの方から言ってきた。穏やかな声だった。

「是非」

「フラウですか」

「そうです」

ドイツ語で『奥様』という意味だ。貴族階級にある婦人に対しての尊称である。英語の『ミセス』やフランス語の『マダム』と全く

同じ意味と使い方である。

「そう御呼び下さい」

「わかりました。ではフラウ」

「はい」

穏やかに微笑んでハインリヒの言葉に応えてきた。

「この辺りに宿はあるでしょうか」

「あります」

こうハインリヒの問いに答えてきた。

「御安心下さい」

「ではどちらに」

「ここです」

そしてこう言うのだった。

「ここにあります」

「ここに！？」

「はい、そうです」

気品のある笑みでハインリヒに対して答えてきた。

「是非この城にお泊り下さい」

「貴女のお城にですか」

「遠慮なく」

微笑んで彼に告げるのだった。

「召使い達もいますし。一人ではありません」

「左様ですか」

「はい。そちらの」

「ああ、フリッツといいます」

従者に代わって答えたハインリヒだった。

「我が家に代々仕えていまして。気のいい男です」

「そうなのですか」

「一緒の部屋にしてくれませんか」

そしてこう願い出るハインリヒだった。

「この男と」

「御一緒ですか」

「旅の間はずっと寝食を共にするようにしています」

奥方にこう述べるハインリヒだった。

「お互い。それが一番安心できますので」

「左様ですか」

「いけませんか？」

奥方の目を見て問うた。

「それは」

「いえ」

だが奥方は彼のその言葉を聞いて静かに微笑んで頷くのだった。

「ではそれで。部屋はお一つですね」

「ええ。それで御願います」

身分や主従の関係もあり全て奥方と自分で話を済ますハインリヒだった。

「そういうことで」

「わかりました。それでは」

「ええ」

「こちらへ」

こうして二人は城に案内されることになった。城の中はこれまた古風で壁も床も全て石造りだった。城壁と一体化した中世初期の城であった。

二人はその中の一室に案内された。ところがここでフリッツは。城の壁に鏡を認めたがそこであるものが見えなかったことを見てしまったのだった。それを見て微妙な顔になるがそこで奥方が二人に声をかけてきた。

「こちらです」

「こちらの部屋ですか」

「はい、こちらです」

案内されたのは背の高いベッドが一つ置かれている石の部屋だった。窓もただ穴を開けただけでそこを木の雨戸で閉めるものだった。

装飾もなく木造の椅子が二つにテーブルが一つあるだけの。薄暗い部屋であつた。

「こつした部屋しかありませんがお許し下さい」
「いえ」

だがハインリヒは彼女の謝罪の言葉を微笑みで打ち消したのだつた。

「私達の様な旅人を入れて下さつただけで有り難いことです。ですから」

「宜しいですね」

「はい。身に余る光栄です」

「有り難い御言葉です。それでは」

奥方はハインリヒのその言葉を聞いて落ち着いたような笑みになつて頷く。そうしてその笑みでまた彼に対して言うのであつた。

「御夕食の用意ができましたら」

「御夕食もですか」

「そうです。鴨が獲れましたのでそれを」

「鴨が」

「家の者が獲つて来ました」

こつハインリヒに答えるのだった。

「ですから。それをどうか」

「左様ですか。では御言葉に甘えまして」

「葡萄酒にパンもあります」

中々豪勢であつた。少なくともこの様な森の中にある城でそうおいそれと手に入るようなものではなかった。ハインリヒはそれを少し不思議に思いフリッツはかなり異様に思った。しかしそれは二人共、特にフリッツは顔には出さないのであつた。

何はともあれ奥方の話は終わった。二人は彼女が部屋から姿を消すとまずはそれぞれのマントや鎧、外套等を脱いだ。剣や斧も置いて身軽になるとあらためて大きく息を吐き出すのだった。

第四章

部屋はやはり薄暗い。窓から見える景色も急激に夜の帳に覆われていく。その中でハインリヒはフリッツに対して言うのであった。

「運がよかったね」

「運がですか」

「だってそうじゃないか。今日は野宿を覚悟していたんだよ」

このことを明るく話すハインリヒだった。

「運がいいじゃないか。違うのかい？」

「だいいいですけれどね」

しかしそんな主に対して彼の返事は今一つ明るいものではなかった。むしろ暗いものだった。

「本当に」

「何か用心しているのかい？」

「旦那様」

ここで真剣な顔で主に問うてきた。

「この城は森の中に一つです」

「うん」

それはもう言うまでもないことだった。見ればわかる。

「それはね」

「それにです」

フリッツはさらに言葉を続ける。

「家にも私のような者がいると聞いていますが」

「使用人達が？」

「獵師を含めてです」

このことも主に話した。

「少なくとも鴨を捕まえられるような」

「そんなの普通にいるんじゃないのかい？」

「だとすればですよ」

語るその顔が怪訝なものになっていた。

「何か静かじゃないですか？」

「静か！？」

「この城がですよ」

その顔でまた主に語る。

「今だって何の物音もしませんよね」

「聞こえないだけじゃないのかい？」

「それにあの奥方様にここまで案内される時」

「さつきまでだよ」

「お城の誰かを見ましたか？」

「今度言うのはこのことだった。」

「誰かを。どうですか？」

「そういえば」

言われてみればそうだった。彼もフリッツも奥方の他は誰も見ていなかった。これだけは間違いがなかった。

「いないね、どうにも」

「それですよ。何かおかしいですよ」

「おかしいっていうと」

「まだ確かなものはありませんけれどね」

話しながら周囲を見回す。薄暗い部屋の中で何も無いがそれでも何かを感じて見回している顔であった。

「どうにも」

「気にし過ぎじゃないかな」

「そうだったらいいですけれどね」

「まだ疑っているのかい」

「ええ、まあ」

今度のフリッツの言葉ははっきりとした肯定であった。その怪訝な様子も今は隠そうともしなかった。

「そう思ってたさって」

「まあいいさ。ところで」

「はい」

「多分もう少ししたら夕食だけれど」

彼はこのことに話を移してきた。

「どうするんだい？フリッツは」

「どうするっていいですよ」

「多分僕はフラウに招待される」

こう言うのである。

「けれど君は」

「ええ、いいですよ」

別にそんなことは構わないといった調子のフリッツだった。

「それはね。私はここで」

「部屋で食べるのかい」

「御主人様と従者が同じ部屋で食べていいなんて法律はありませんから」

身分社会では身分の違う者達と同じ部屋で同じものを食べるなぞ想像もできないことだった。特にそれがかなり強固だった欧州の社会においては。平清盛が冬の外で仕事をしている下人達に部屋の中に入るように言うといったことすら考えられない程の社会だったのだから。

「ですから私はここで」

「そうか。じゃあ僕だけか」

「ええ。ただしです」

「ただし？」

「あくまで私の気苦労ならいいですよ」

念を押すフリッツだった。

「若旦那様」

「うん」

「鏡をよく御覧になって下さい」

「鏡を？」

「そう、鏡をです」

こう言うのである。

「それもよく」

「鏡に何かあるのかい」

「御覧になられればわかります」

また同じ意味の言葉を繰り返す。

第五章

「よく。宜しいですね」

「何だかよくわからないけれど」

「それでもです」

あくまで念を押すフリッツだった。

「よくです。宜しいですね」

「わかったよ。鏡だね」

「はい、そうです」

また答えるフリッツだった。

「それではそういうことで」

「うん。それじゃあ」

「私はこの部屋でお待ちしています」

考え深い目で主に述べた。

「その時には」

「わかったよ。じゃあ今はとりあえず」

「はい」

「休むか」

とりあえずはそれであつた。

「よくね」

「ええ。そうしましょう」

とりあえず夕食まで小休止に入る二人だった。やがて奥方の声がノックする音と共に扉の向こうから聞こえてきた。それで目を覚ました二人はすぐに何で呼ばれているかわかった。

「夕食だね」

「そうですね」

二人は顔を見合わせて頷き合った。

「それじゃあ僕は行くけれど」

「鏡です」

念を押してきた。

「くれぐれも。いいですね」

「わかったよ。それじゃあ」

「後。若しもですが」

フリッツはさらに慎重を期すようにしてまた言っのだった。

「これはないと思いますが」

「毒かい？」

「そうです。ですから」

そつと差し出してきたものがある。それは。

「これを持っていつて下さい」

「それは確か」

「はい。実は先の街の市で拾ったものでして」

「銀のスプーンじゃないか」

「まさかこんなものが落ちているとは思いませんでした」

フリッツは真顔で語る。言うまでもなく銀は高価なものである。

この銀の食器を使えるということは貴族の証であるとされた時代もある程なのだから。

「ですから。これを」

「わかったよ。じゃあ持って行くね」

「はい。どうぞ」

その偶然拾った銀のスプーンを手渡す。そのうえでフリッツは主にそつと囁くのだった。

「このスプーンが曇ればです」

「食べ物には毒があるのかい」

「その通りです。そして若し」

「若し？」

「鏡がなければ」

その危険も既に察知しているのであった。

「これを鏡にお使い下さい。宜しいですね」

「わかったよ。じゃあそうしてね」

「はい。それでは」

「言つて来るよ」

「ハインリヒ様」

ここで彼を呼ぶ声がまた聞こえてきた。

「起きておられますか？」

「はい」

ハインリヒはその呼び掛けに応じて声をあげた。

「起きています」

「では。おいで下さいませ」

こう彼を呼ぶのであつた。

「夕食の用意ができております」

「わかりました。それでは」

「従者のものは既にこちらに置いてありますので」

既にそれは持つて来ているというのだ。

「部屋で食べるようにと」

「わかりました。ではフリッツ」

「ええ」

顔を見合わせながら言葉を交えさせる。

「行つて来るよ」

「どうぞ」

まるで末期の別れのように真剣な面持ちでお互いに別れを告げて部屋を出る。そして奥方の夕食に向かう。奥方はしずしずと廊下を進みそうして食堂に入った。彼女について行くと初老の男の使用人が一人、若い女の使用人が二人控えていた。そして木製でその上の白いテーブルかけがかけられたテーブルの上にはもう料理が置かれていた。奥方の話通り鴨を焼いたものであつた。それとスープもあつた。

「さあ」

奥方は彼もその食堂に入るとあらためて彼に顔を向けて声をかけた。

「どうぞ」

「わかりました。それでは」

「食事はたとありますので」

見ればその通りだった。パンもかなりの量があり鴨の他にも河魚や果物等がたとと積まれていた。林檎や杏がこれでもかという程あった。

「どうぞ。召し上がって下さい」

「はい」

頷きながら奥方の動きに合わせてテーブルに座る。その時胸にペンドントに似せてかけてあったあの銀のスプーンを見る。するとそこに映ったものは。

「!？」

何もなかった。映っていなかった。それを見て内心飛び上がらなばかりに驚いたハインリヒは一旦目をきつく閉じてもう一度スプーンに映る奥方を見た。すると今度映ったのは。

「!？」

今度はやたらとすりりとして色の白い、尚且つ青い髪的美女だった。とりあえず奥方とは似ても似つかない姿形をしているのはわかった。

（これは……）

とりあえずフリッツの言った通りおかしなことなのはわかった。だがこの奥方なのかはまだわからない。警戒しながら切られた肉を受け取る。その時そつとスプーンにその肉を近づけたがスプーンは曇らなかった。どうやら毒はないようである。

（それはないか）

「さて」

彼がスプーンを見ているとここで奥方が声をあげてきた。

「宜しいでしょうか」

「はい」

「今夜のことです」

奥方は厳かな声で彼に声をかけてきた。手で肉を食べるその様子は実に貴族的で優雅なものである。この時代欧州では手で食べていたのである。

「今夜ですが」

「何かあるのですか？」

「このままお泊り下さい」

「左様ですか」

「その為にお招きしたのですから」

それは確かに彼に告げるのであった、

「それは」

「有り難き御言葉」

「お酒もありますので」

「これです」

見れば杯には葡萄酒がある。赤い見事な葡萄酒だ。そこに生姜も少し混ぜて入れられているのがわかる。

「これを頂いて」

「どうぞお召し上がり下さい」

「わかりました」

その言葉に頷く今度は杯を手取る。木の簡素な杯だがそれは気にならなかった。それよりもこの酒に何かされているかの方がずっと不安だったからだ。

第六章

それでその杯もそつと胸にかけてあるスプーンに近寄せる。やはり曇りもしない。これにも毒は入っていないかった。

パンにも魚にも果物にもだった。食事は安全でしかも美味かった。まずはそのことに安心した。しかし完全に安心したわけではなかった。

頃合いを見てこつそりとまたスプーンの鏡の様になっている部分から奥方を見る。すると今度は皺がれた老婆に見える。次に見ると元の姿でありまた見ると今度は幼子だ。見る度に姿が違う。

（魔物か）

こつこつも思ったがどうも違うようだ。彼は今その胸に十字架もかけているがそれを前にしても何にも同ずるところはないからだ。魔物や悪魔といった類ならこの十字架が近くにあるだけでも恐れる筈だから。だからそうでもないこともわかるのだった。だがそれでも安心はできないのだった。

どうにも訳がわからず食事を続けながら夕食を進めていく。そうして緊張を含ませたまま食事を終えたとまた奥方が彼に言ってきたのであった。

「では後は」

「はい」

「ゆつくりとお休み下さい」

「部屋に戻って宜しいですね」

「何もなくて申し訳ありませんが」

テーブルに置かれていたボールで手を洗う彼に対して述べる。既に奥方は手を洗い終え初老の執事が差し出した布でその手を拭いていた。ハインリヒに対しては娘の使用人の一人が側に控え何時でも布を差し出すようにしている。実に気がつく。だが彼はその娘から生の感触を全く感じてはいなかった。

「そのように御願います」

「フリッツですが」

「同室ですね」

「それで御願います」

このことを彼女に言うのだった。

「是非」

「わかりました。それでは」

こうして夕食は終わった。彼は布で手を拭きながら時折使用人達もスプーンに映してみる。するとそこに映るのは小鳥だったり狐だったりリスだったり元の姿だったりする。やはりどうにもこうにも訳がわからない。心の中で首を捻っていたがやがてそれも終え部屋に戻った。そうして食事を摂らずに主の帰りを待っていたフリッツに声をかけた。彼は自分の寝る場所に外套を置いてそれを寢床としていた。そうしてその前に木の盆に置かれた夕食を置いていた。見ればメニューはハインリヒが食べたものと同じだった。量が違うだけである。

「若旦那様、御無事でしたか」

「一応はね」

「一応は、ですか」

「うん。ところで」

まずはその胸にかけてあった。スプーンを外す。そのうえで彼に對して返してから言うのであった。

「一応確かめておくべきだけれど」

「ええ」

「食べ物安全だったよ」

「食べ物、ですか」

「そのワインもね」

「食べるものは大丈夫なのです」

「美味しいものさ。けれどね」

ここでハインリヒの目の色が変わった。フリッツの向かい側に腰

を下ろしたうえで言うのであった。

「どうにもね」

「やはりおかしいですか」

「まず姿が映らなかった」

最初にこのことを述べた。

「姿がね」

「ではやはり私の見た通り」

「けれどそれだけじゃなかった」

もう一つ言い加えるのだった。

「それだけじゃなかったよ」

「といいますと」

「次に見た時は青い髪的美女で」

「青い髪の！？」

「それから老婆になったり幼子になったり」

「移り変わっていったのですか」

「けれど目に見える姿はそのままだったんだ」

剣呑な目で語る。

「それはね」

「またそれは面妖な」

フリッツもそれを聞いて目を顰めさせる。そうさせながら食事を摂ることは忘れない。鴨や魚、それにパンと果物を葡萄酒で美味そうに流し込んでいくのであった。

「見る度に姿が変わるとは」

「どう思う？」

真剣な目で従者に問うた。

第七章

「このことは」

「まず人ではありませんな」

「このことだけははっきりとわかるフリッツだった。」

「それも間違いなく」

「そうだね。だったら一体」

「実はです」

彼はここで語った。

「最初私はあの奥方は亡霊だと思っていました」

「亡霊!？」

「そうです。我々は鏡に映りますな」

「うん」

「このことは間違いない。フリッツもこくりと頷いて応えた。」

「その通りだよ」

「それは生ある者の証なのです」

「生ある者の」

「鏡に映るものはその者の魂、若しくは本来の姿であるとも言われている」

「本来の!？」

「その通りです。ですから亡霊は鏡に映らないのです」

「こう言うのである。」

「何故なら既にこの世の者ではなく身体はないからです」

「あ、身体がないのなら」

「そうです」

「この場合は話の后者になるのだった。」

「本来の姿がそこにはない為に」

「成程、だからか」

「はい、そうなります。従ってあの奥方の姿が見えなくなった時に」

「彼女を亡霊と思った。そういうことだね」

「それは今さつきまででした」

「このこともあえて告白するのであった。

「若旦那様のお話を御聞きするまでは」

「そうだったんだ」

「ですがお話を聞いて何だか」

「食べながら深く考える顔を見せてきた。

「わからなくなってきましたな」

「わからないのかい」

「とにかく人ではありません」

「このことだけは確かであった。

「ですから。ここは」

「どうするべきだというんだい？」

「すぐに逃げるべきです」

「言葉は真剣そのものだった。

「今すぐにここを。宜しいでしょうか」

「相手が人ならともかくだね」

「その通りです。若旦那様も私も腕に覚えがあります」

「うん」

フリッツの今の言葉に頷く。それはまさにその通りだ。誰と戦ってもせいじょそこいらの追い剥ぎや山賊なら何人いても倒せる自信はあるし実際に今までそうしてもきている。フリッツもいれば尚更であった。しかし彼は異形の存在の相手はしたことがない。それならばもう言うまでもないことであった。

「ですが異形の相手は」

「したことがないね」

「その通りです。ですから」

「今すぐにここを逃げるべきだというのかい」

「宜しいでしょうか」

鋭い目で主に問うのであった。

「それで」

「そうだね」

従者のその言葉を受けてハインリヒも考え込んだ。腕を組み顔を下にやる。そうして出て来た結論は。

「よしっ」

「どうされますか？」

「フリッツ、すぐに全部食べ終えてくれ」

「今終わりました」

「また随分と早いね」

もう少しかかると思っていたのでこれには少し拍子抜けしたように驚いた。

「今だなんて」

「食べるのが早いのが私の長所ではないですか」

「まあ確かに」

にこりと笑ったフリッツのその言葉に頷きはする。

「その通りだけれど」

「そういうことです。それでは」

「うん」

あらためてフリッツの言葉に頷く。

「行こうか。今すぐに」

「お互い酒に強くて助かりましたな」

「ああ、それはね」

立ち上がり剣を腰に備え付け上からマントを羽織ってからフリッツに答える。

「その通りだな。それだけでも助かったよ」

「その通りです。それでは」

「何処から逃げるんだい？」

「こちらです」

こう言って指差したのは部屋の窓だった。雨戸に閉められたその窓は見れば中々大きい。ハインリヒでも通り抜けられそうな広さで

あつた。

「あれを通つて逃げましょう」

「窓からかい」

「何か？」

「いや、やっぱりね」

どうにも苦笑いというか困つたような笑いになるハインリヒであつた。

「それはどうも」

「お嫌ですか？」

「騎士としてはね」

騎士道を話に出すハインリヒであつた。

「やっぱり。逃げるにしても」

「正々堂々とですか」

「今すぐなのはその通りだよ」

それについては完全に納得しているハインリヒであつた。

「けれどね。それでも」

「逃げる場所ですか」

「あそこじゃなければやっぱり駄目かな」

あらためて窓を見るのであつた。

「どうしても。駄目かな」

「若旦那様」

主を咎めるわけではなかった。むしろ教諭するような、そんな顔と声で彼に語るフリッツだった。

「相手は何者かわかつたものではありません」

「それはわかるよ」

「人間でないことだけは確かです」

また言うフリッツだった。

「そんな相手に対してまともに逃げてもいいことはありません」

「そうなるんだね」

「私はそう思います」

あくまで自分の考えだと前提はする。しかしだった。

「ですが。それしかないと思いますよ」

「窓から逃げるしかない」

「そういうことです。幸いあの大きさだと人間が充分出られます」6
今度は窓を見る。確かに人が充分通り抜けられる大きさだ。そこから出れば充分だというのだ。少なくともフリッツはそれで決断していた。

「ですから」

「よし、わかったよ」

そしてここでハインリヒも決断したのだった。その決断は。

「窓を使おう」

「そうされますね？」

「うん。そうも言うてはいられないね」

このことが一番大きな理由だった。

「相手が人間じゃないんなら。余計に」

「そういうことです。それじゃあ」

「まず荷物を外に出して」

「はい」

決めたら動きは早かった。決断も行動も素早く、戦場で生き残る為の絶対条件である。ハインリヒもフリッツもこれまで戦場にいたことがあるのでその二つは見事なものだった。

第八章

そうしてすぐに窓を開ける。ところがだった。

「むっ!？」

「なっ!？」

フリッツが窓を開けた途端そこから砂が入って来た。砂はすぐに

二人の目に入ってしまった。

「な、何だこれは」

「砂!？これは」

それを認識するともう。二人は動けなくなった。

「い、いかん」

「眠い………」

急激に眠くなっていく。すぐに立つてはいられなくなった。

そうしてその場に倒れ込んでしまう。後はもう何も考えられなくなり深い眠りに落ちてしまった。そうして。

不意に頬に暖かいものを感じ、瞼に光が差し込んで来るのがわかる。それに気付いて目を開けると。

「あれ………!？」

「若旦那様!？」

二人は何もない森の中の湖のほとりに身体を横たえさせていた。身体を起こしてもそこにあるのは森と湖ばかりで他には何もない。当然二人が昨夜いた城なぞ何処にもなかった。

「ここは一体」

「あのお城は」

ないのだ。どれだけ周りを見回しても。二人はそのことに首を傾げずにはいられなかった。

「これはどういうことなんだい？」

「私にも何が何だか」

二人共理解できなかった。何が起こったのか。それで首を右に左

に捻っていたがやがて少し落ち着きそれぞれの身の回りを見た。と
りあえずは。

「剣はあるな」

「斧もあります」

それぞれの武器はあった。

「あと荷物も」

「お金もありますよ」

続いてそういったものもチェックした。しかも二人のすぐ側には
ハインリヒのあの馬までいた。彼は主の側まで来て彼を心配そうに
見て顔を側に寄せてきていた。

「こいつもいるし」

「特に何も無いみたいです」

「しかしだ。どうして」

ここでまたハインリヒは言うのだった。怪訝な声で。

「あの城は何処に行ったのだ？」

「それですよ」

フリッツもまた主のその言葉に応える。

「見たところ何処にもですけれど」

「だが昨日は確かにあった」

「ええ」

それは間違いない。二人もそれははっきりとわかっている。

「しかし今は何処にもない」

「幻だったんでしょうか」

「ううむ。一体」

「ははは、幻じゃないですよ」

「そうそう」

ところがここで。不意に湖の方から声がしたのだった。

「あれは私達のお城でさ」

「驚かれました!？」

「!?!湖の方から」

「今度は一体」

その声に二人同時にその湖の方を見た。するとそこにいたのは。湖の上に彼等は浮かんでいた。そこにいたのはあの奥方に老婆に幼子に青い髪の女に。他にも色々といた。だが誰もが人間でないのがすぐにわかった。何故なら皆湖の上に立っているからである。

「ほんの悪戯のつもりでしたが」

「いやいや、かなり驚かれて」

「拳句には化け物とされているようでしたし」

「そうではないのか？」

ハインリヒはこれ以上はないという程に眉を顰めさせながら彼等に対して問うた。

「貴殿等は。違うというのか？」

「はい、違います」

あの奥方が答える。今度はあの陰気さはなくやけに明るい顔である。まるで喜劇役者の様に朗らかに笑っている。それで顔まで変わって見える。

「私達は化け物ではありません」

「では何だ？」

「妖精です」

「妖精！？」

「そうです。妖精です」

「ですから鏡に映った時に」

彼等は口々に明るく笑いながら二人に対して言ってきた。

「こころ姿が変わりましたでしょ？」

「それだ」

ハインリヒはそこを指摘する。

「それで化け物だと思ったのだ」

「姿は私でも」

また奥方が言う。

第九章

「中身は常に変わっていたので」

「常にだと!？」

「そうです。ですからスプーンに映るその姿も」

「変わっていたんです」

「そういうことです」

こういうことだったのだ。彼等は奥方自身だったり奥方に化けた妖精の誰かだったりで始終交代していたのだ。だからスプーンに映る姿は常に変わっていたのである。

「見られることはわかっていましたし」

「もうね。人のやることはいつもそれなんで」

「むう。読まれていたのか」

「皆同じだからねえ」

「ねえ」

ここで顔を見合わせて言う妖精達であった。

「そういうことだから気にしなくていいよ」

「そのことは」

「気にするなと言われても」

そうはいかない生真面目なハインリヒだった。そもそも彼は今こうして妖精達を見ていることこのことがあまりにも信じられないのだから。

「何故貴殿等の様な者達が」

「世の中にいるのは人間ばかりじゃないし」

「そうそう」

「では悪魔か？」

やはりここでも生真面目な彼だった。言葉にそれがはっきりと出ている。

「妖精と言いながら」

「だから違っただって」

「私達はあくまで妖精」

「別に人間を陥れたり魂を取ったりしないし」

「それは保証するよ」

「では今のは何だ」

厳しい顔で彼等に対して問うハインリヒだった。まだ警戒を解いてはいない。

「この様なことを」

「この様になって悪戯じゃない」

「それがどうかしたの？」

「やはりたばかっていたのか」

今の妖精達の言葉に怒るのだった。

「この私を」

「だから違っのに」

「わからないのかな、この人」

「ひょっとして頭堅いの？」

「人間だよねえ」

今度は人間全体をさすような妖精達の言葉であった。

「最近の人間ってとにかく難しく考えるよね」

「全く」

「最近だと？」

「そうだよ、そのキリスト教とかいうの」

「それにかぶれてから」

キリスト教についてもこんな感じであった。全く信仰している様子は無い。それどころか明らかに馬鹿にしているのであった。

「そんなふうになってね」

「昔はもつとありのままに見れたのに」

「とにかくだ」

ハインリヒは彼等の話を強引に打ち切るようにしてまた言った。
た。

「貴殿等は私をたばかつてはいないと言いたいのだな」

「その通りだよ」

「そんなことはしないよ」

彼等の返事は少し強いものになっていた。どうやらそれだけははつきりと言いたいらしい。

「僕達がするのはあくまで悪戯」

「それ以外はしないから」

「それではあの砂は一体」

フリッツがここで口を開いた。

「不意に我等を襲ったあの砂は」

「ああ、あれ」

フリッツの言葉を聞いた大きな袋を背負っている老人がここでも言った。見れば背丈は人間の半分程度しかない。頭には大きなナイトキャップを思わせる帽子を被っている。

「あの砂ね」

「むう！？その方は」

「あれはわしがやったんじゃないよ」

そして老人はフリッツに応えるようにしてこう言うのであった。

「あれはね」

「何の為にだ？」

「決まってるじゃないか。眠ってもらう為だよ」

老人は何を今更といった感じで彼に答えた。

「朝までね。ぐっすりだね」

「ぐっすりと」

「わしはサンドマンっていうんだ」

そしてここで名乗ってきた。

「この袋に入っている砂をかけて寝てもらうのが仕事さ。ゆっくりとね」

「むう、それで我等は」

「寝ていたというのか」

ハインリヒも言う。種はわかったがそれでもどうにも釈然としな
いものも感じている二人であつた。とにかく悪戯に遭つたのは事実
だからだ。

第十章

「しかしだ」

「しかし？」

「今度は何なのかな」

「悪戯のことだ」

ここでも生真面目な態度のハインリヒだった。もうその手に剣は持つてはいないがそれでも目は顰めさせている剣呑なものを少しだけ漂わせて彼等にまた問うのである。

「そのことだが」

「そのことがどうかしたの？」

「何故悪戯をする？」

こう彼等に問う。

「何故だ、それは」

「何故って？」

「理由がいるの？」

「どうして？」

「どうして？では何の意味もなくしているのか」

「だって私達妖精だし」

ハインリヒの問いにこう返すのだった。

「妖精が悪戯するのって普通じゃない」

「そうそう」

彼等の中で自己完結してしまっていた。

「妖精なんだからそれが仕事なんだし」

「理由なんてないわよ」

「わからんな」

妖精達の言葉を聞いてさらにわからず首を捻るのだった。

「悪戯をするのにも理由がいらないのか」

「だから妖精だから」

「そんなのいるの？」

「むう……」

ここまで言われては彼も言葉がなかった。ついつい言葉を詰まらせてしまう。最早話しても何かが違うのだと思うものもそこにはあった。

「そういうことだから」

「気は悪くないでね」

謝るわけではないがこう二人に言ってきた。

「晩御飯は本物だし」

「風邪もひかないようにしておいたから」

「そういえば」

「確かに」

言われてみればそうである。腹は満ちているし身体の調子もいい。それに関しては悪戯はなかった。

「そういうことだからね」

「縁があつたらまた会おうね」

「縁があつたらというが」

そう言われてもまだ問いたいことがあり実際に問うハインリヒだった。

「湖の上に立っているのは魔術か」

「まあそういうのかな」

「それだけど？」

「そうか。魔術か」

それを聞いてまずは納得するハインリヒだった。これで話を終えようとしたがここで妖精達は自分達からも話してきたのであった。

「ああ、それでさ」

「一つ言っておくけれど」

「何だい？ 一体」

「この湖に入ったら駄目だよ」

「それだけはね」

こうハインリヒに対して言うのであった。当然フリッツに対しても。

「入ったらそれこそ悪戯じゃ済まないから」

「殴るかもね」10

殴るとまで言うがあまり迫力はない。本気だが殺すつもりがないのがわかるからだ。

「この中は僕達の家だから」

「招待しない限り入ったら駄目だよ」

「別に入りたくもないけれどね」

「全くだすな」

ハインリヒとフリッツは言葉を同じくさせた。

「別に妖精の家には」

「興味がありません」

「何だ、面白くないなあ」

「ここで来たいって言えば面白かったのね」

二人が特に入りたくない様子を見せたので面白くない顔で言う妖精達だった。

「御願いしたら入れてあげるよ？」

「どう？」

「いや、今は別に」

「私も」

やはり二人の返事は変わらない。やはり特にも入りたくはないのであった。

「そういうことだ」

「気持ちだけ受け取っておこう」

「そうなんだ。それじゃあもう何も言うことはないし」

「またね」

妖精達はすぐに気持ちを取り戻してまた二人に話してきた。

「今度会う時はもっと面白い悪戯用意しておくから」

「楽しみにしておいてね」

「別に会いたくはないけれどね」

ハインリヒは特に面白くなさそうに返すのだった。

「けれど。またね」

「私も」

フリッツも一応はという感じで妖精達に対して述べた。

「また会おう」

「うん。またね」

「今度はお家に招待してあげるからね」

「僕達の湖の中のお家にね」

こんなことを言いながら湖の中に消えるのだった。勝手なことを言っただけのまま姿を消した形だった。何はともあれこれで話は終わった。湖のほとりにハインリヒとフリッツだけが残っている。二人は妖精達が消えてからもまだそのほとりに座っているのだった。

「何かな」

「ええ」

フリッツが主の言葉に応えて頷く。

「あつという間だったね」

「全くです。何が何だか」

「とりあえず。妖精には会った」

「はい」

「何が何なのかわからないうちだけれど」

「それでも悪くはなかったですが」

「うん。けれど」

それでも微妙な顔のままのハインリヒであった。どうにも釈然としないままである。

第十一章

「何だったのかな」

「無事だったのはいいですが」

「悪戯にもあつたし」

このことも言うが実際のところそれは彼等の中で大きくはなかった。あまり心に引つ掛かつていないがそれでも少しは思つたのだつた。

「全く。よくわからないな」

「はい。ですが若旦那様」

「何だい？」

「こういうものかも知れませんか」

フリッツは釈然としないながらも主に対して述べるのだつた。

「結局のところは」

「こういうものとは？」

「妖精というものです」

彼が言うのはこのことだつた。

「妖精は。そういうものでしょう」

「よくわからないものだっていうのかい？」

「はい」

答えはするがやはりその顔は釈然としないままであつた。だがそれでも彼は言うのである。自分の主に対して少しずつではあつても

「世の中わかることとわからないことがありますね」

「わからないこともある？」

「またわかります」

こう答えるフリッツだつた。

「より長く生きておられれば」

「世の中にはわからないものもあるものなんだね」

ハインリヒは従者の言葉を聞いて首を傾げる。彼はどうもまだそういうことがわかつていないようだつた。これもまた若さであろう

か。

「そういうものなんだ」

「そうです。人間の中でもそうですし」

「うん」

「ましてや相手は妖精です」

「妖精……」

「そう、妖精です」

また答えるハインリヒだった。

「相手が妖精ならば余計に」

「わからないこともあるんだね」

「というよりわからなくて当たり前なのでしょう」

彼はまた主に述べた。

「人間ではないのですから」

「人間ではないからなんだね」

「人間でもわからないことが多いのです」

フリッツの言葉は宗教というよりは哲学であつたがこの時代は欧州の哲学は完全に神学、即ちキリスト教に属していたものでありはつきりと分けられてもいなかったたので哲学という概念は語るフリッツ自身にとつても実に希薄なものであつた。だがそれでも彼は言葉を続ける。

「ですから。人間でない妖精なら」

「当たり前ということだね」

「そう思います。それについて考えを突き止めていくのもいいですよ」

「それも？」

今の言葉はこれまたハインリヒにはわからないものであつた。

「ですが置いておいてもいいのです」

「どっちでもいいものなんだ」

「答えは一つではありませんから」

「答えは一つじゃないんだね？」

「どちらも正解の場合もあればそうでもない場合もあります」

またしても哲学的な言葉であった。

「ですから。それは」

「考えても考えなくてもいいんだ」

「それで若旦那様はどうされますか？」

「僕かい」

「そうです。若旦那様は」

「そうだな」

従者の言葉を受けて腕を組んだ。そうして考える顔になって述べるのだった。その言葉は。

「まずはこの旅を続けるよ」

「まずはですか」

「けれど。面白いとは思ったよ」

素直に己が感じたことを述べるのだった。

「妖精についてね。だから」

「だから？」

「帰ったら色々調べてみよう」

こうフリッツに述べるのであった。

「そしてそれを書き残しておくよ」

「左様ですか」

「それもいいよね」

今度は彼が問うた。

「それで。書き残しておくのも」

「はい。それでいいと思います」

彼にしてもそれで異論のないことであつた。何しろ今しがたどれが正しいか間違っているかということは言えないということを述べた本人であるからだ。

「それもまた」

「では僕が選ぶのはそれだ」

今選んだことも告げた。

「それをね。やるから」

「わかりました。それでは」

「そうするよ。それじゃあ」

ここで立ち上がった。

「行こうか。また」

「旅にですね」

「まずはそれだよ。ひょっとしたらまた妖精に会うかも知れないしね」

「今度はどうなるでしょうか」

「何が出て来るか」

二人はそれぞれ述べた。

「大変なことになるかも知れないけれど楽しみでもあるし」

「はい。それでは」

「行こうか」

こうして二人は再び旅をはじめのだった。この旅から帰ったハインリヒはその言葉通り妖精に関しての研究をはじめ彼等に関することを本として残した。後に彼の話はグリム兄弟達が聞き編集され今も残っているという。この話はグリム兄弟がまとめたものではないが他の研究者が編集したものでその書の中にある話の一つだ。彼が実際に体験した話なのかどうかはわからないが妖精というものの行動の一つを書き残しているものなのは確かであり今ここに紹介しておくことにする。この旅を遂げた二人のことを伝える為にも。

鏡に映るもの

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5498g/>

鏡に映るもの

2010年10月8日14時35分発行